

2023年11月5日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「朽ちないものを着る」

聖書：コリントの信徒への手紙一 15：50～58

ここでは人の「死」について語られている。「死」は、生きている者にとって必ず訪れるもの。健康な体を持っていようが、お金、知恵を尽くしたとしても、生きている者は皆、「死」という問題にぶつかる。家族の死、知人友人の死は、悲しみをもたらす、自分の死は、時に恐れをもたらす。死というものは、いつの時代も最大の課題、「敵」とも思えるほどに我を惑わすものだったりする。ところが聖書には、主イエスの復活が記され、私たちキリスト者には最大の恵みが注がれているが、どうだろうか、その復活の恵みが私たちには満ち溢れる恵みとしてあるだろうか？

今朝の聖書は、死と向き合う事の中から、このような言葉が綴られている。《この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」》人間の体は「朽ちるもの」。しかし聖書は、死は決してこれでおしまいというものではないと言っている。それは「朽ちないもの着る」ことにおいてと言うわけだが、この「朽ちないもの」とは何か？

私の神学部の同期が、妻と子に先立たれるということがあった。「なぜ、・・どうして、妻が、息子が、先に行ってしまったのか？」“死”に対する悲しみを背負う中で、悲しみは、中々癒えないものであるが、しかし聖書の中に「暗闇の中に光があった」とある言葉に慰めを受けたという。死が暗闇とするなら、その暗闇は決して暗いままではないということを聖書から示されたという。死の暗闇の中に光がる。また「光は暗闇の中で輝いている」という言葉もあるが、その光とは、イエス・キリストご自身であること。そのことを信じる事がどれだけ慰めであるか。イエス・キリストを信じ、聖書を読むことが、どれだけ人生の支えであるか。死は単なる永遠の命への「通路」にすぎなくなるもの。すべて神の懐へ導かれるものであると・・・。

それは此の世と天の国が一体であること、繋がっていることを言っている。決して天の国は、遠く離れた彼方にあるものではないということ。「朽ちないものを着る」ことで、私たちも神の懐に帰ることが出来るその希望にあずかっていきたい。イエス・キリストの死からの復活の出来事は、決してよそ事ではなく、「死」という見えない世界に、暗闇とも思える世界に、希望の光を灯してくださる私たちへのメッセージとして、「復活」の業はある。主の恵みに感謝！（神谷）